



子育てと教育のまち 越生 よく学び 未来をひらく 越生の子

越生町の教育



中学校への円滑な接続

系統的、計画的な教科指導・生徒指導・体験活動等



小小連携
合同授業
合同行事



目指す越生町のこども像

義務教育9年間を見通し、目指す越生町のこども像（児童・生徒の姿）を共有し、「知・徳・体」のバランスのとれた一貫性のある教育を推進します。

知
確かな学力と自立する力を身に付けたこどもたち

徳
思いやりや感謝の心を持ち規律ある生活ができるこどもたち

体
健やかな体を育みたくましくがんばり抜くこどもたち

越生町教育委員会

詳細はこちらをご覧ください。



越生浪漫 No.206

競馬が行われていたころ

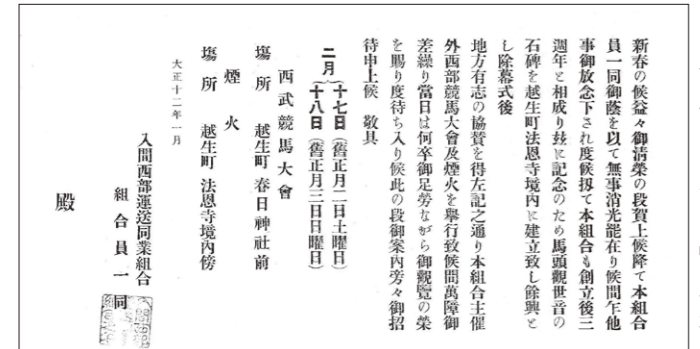
午歳も3ヶ月を経過し、桜花賞、皐月賞、オークス、ダービーと続く、競馬ファン待望の季節が到来しました。

西武競馬大会

越生駅前の法恩寺門前に、2基の馬頭観音の碑が並んでいます。右側の馬頭観音世音は、大正12年（1923）年に、



馬頭尊供養塔と馬頭観音世音（法恩寺門前）



「西武競馬大会案内状」大正12年（1923）



鹿下の学頭沼

明治末年から、鹿下の越生神社でも競馬が行われていました。地元の栗原長作氏が貴重な手記を遺されています。「明治四十四年より、学頭沼の周囲の山林を全区総出で勤勞奉仕（弁当代程度）にて約二ヶ月に亘り競馬場として馬場を開発して秋の大祭に余興として大競馬会を開催した。毎年十月一日より、氏子惣代及び当番、ほか協力員を選出して、各地、飯能、坂戸、毛呂山、小川方面まで大競馬会のピラ張りをしてもらった。全員徒歩です。出場馬毎年五十頭から六十頭の間だった。

各地の馬喰と称す（現牛馬商）が競走馬を看板として数頭ずつ持っていた。県下は勿論の事、東京都下、群馬県下よりも参加せり（県下各地に草競馬場あり順に馬主が廻る）。特に愛好家の手によつてきもいりと称する方々あり。瀬戸金元の関根さん、古池池畑さん、戸口さん、この三方が競走馬大関格の名馬をそれぞれ持つていて、出場場の手配、番付の編成等を一切してくれて、前日までに取組表等を印刷した（馬一頭に付き五人位付人あり）。賞品は、区の全員により、小川、毛呂山、越生、都幾川等の各商店より寄贈を受け。二色三色五色の旗を各一頭に一竿ずつ。最高は桐の箆箭を一棹、以下格によって、それぞれ、つづら、火鉢等。レースは正午より十レースとなし、一レース五、六頭にて行われた。雨天順延にして、合図は煙火（はなび）打ち上げで開催の通知をした。煙火は栗原宅に十月の一日より毎晩、当番及び氏子惣代、ほかに製造になれている者集合して、前の小屋にて大体毎年五十発位作製した。大体雷

鳴で、天竜の出るのも作った。筒は松の木をくり抜き竹のたがを二十ヶ所位かけ、長さ九尺、太さ一尺位にて、今尚、池の中にくさつて在り。競馬場の長さは周囲三百間（約五四〇m）あり。八高線通過により使用不能となり廃止せり。昭和五十九年十月十一日数え八十歳 栗原長作記す」

馬頭尊供養塔
法恩寺門前左側の馬頭尊供養塔は、明治27年（1895）に越生町で初めての乗合馬車を開業した岩崎増五郎の子、岩崎徳次郎が昭和6年（1931）に建立した、使役馬の供養塔です。



馬頭尊供養塔除幕式：碑の右下が岩崎徳次郎